産業経済新聞

平成16年(2004)日刊22264号

11|4[木]

産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞東京本社2004
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎ 東京(03)3231-7111(大代表)

旧制仙台二中の「蔵王遭難」

「蔵王遭難」。この事故を知っているだろうか。今から八十六年前の大正七(一九一八)年、旧制仙台二中(現仙台二高)の登山隊が、山形・宮城の県境、蔵王連峰の熊野岳付近で遭難、生徒ら九人が死亡した遭難事故だ。「悲劇を忘れないように」。連綿と続くその思いは、この秋、一つの登山を生み出した。蔵王を登る人たちには、どんな風景が見えていたのだろうか。

(東北総局 川島英樹)

「大風雪の蔵王山」「数百の捜索隊、風雪のため引き返す」「九名は生存見込み無し」

仙台二高の歴史上最大の悲劇とされる遭難事故は八十六年前。地元紙の河北新報は当時、こう伝えた。

その中に、一つの見出しがみえる。

「父に代わって遭難事故の犠牲者にお詫びを…」。仙台二高山岳部OBらの手を借りながら、熊野岳の頂上に向かう渡辺宏さん(中央)

引責辞任・渡辺校長の三男・宏さん(87)

「校長先生が恨めし い」

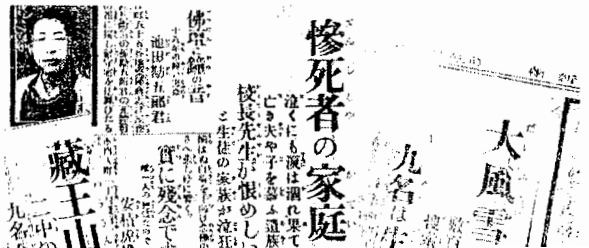
責任を一身に背負ったのは、修学旅行の日程を決め、出発の最終判断を下した当時の渡辺文敏校長(故人)だった。

渡辺文敏校長

校長は、事故対応が一段落すると四十八歳の若さで引責辞職、東京に転居した。再就職の誘いも断り続けて二度と教壇には立たず、その後の人生は、昭和三(一九二八)年十月十六日に五十八歳で亡くなるまで、鎮魂と慰霊の日々だった。

OBと鎮魂の86年ぶり「和」

熊野岳に登頂、慰霊碑に福を祈る渡辺さん(上)と旧制仙台二中(現仙台二高)の登山隊が、山形・宮城の県境、蔵王連峰の熊野岳付近で遭難、生徒ら九人が死亡した遭難事故だ。「悲劇を忘れないように」。連綿と続くその思いは、この秋、一つの登山を生み出した。蔵王を登る人たちには、どんな風景が見えていたのだろうか。(東北総局 川島英樹)



大風雪

九名は生存見込み無し

惨死者の家庭

蔵王山

■時代を超えて

だが、鎮魂の思いは、校長の死で消え去りはしなかった。それは息子に引き継がれた。

神奈川県厚木市に住む校長の三男、渡辺宏さん(八七)は、昭和六十年八月から静かに熊野岳への慰霊登山を四回も続けていた。四回目の平成二年八月には「父から受け継いだ遺志は子供にも引き継がなければ」と、長男も連れて登頂した。

これを知った仙台二高OBの千葉英之さん(七)たちが「この思いに応え ようと、倒れ掛けていたOBらに呼び掛けで集まった。

その交流が山を登り続けた宏さんの遺志を継ぐ会の結成へ。

年ぶりに九八八(昭和六十三)年、渡辺さんが、教職を辞した。その後、仙台二中(現仙台二高)の進学校、十四代目校長に就任。雅子さんの父、小和田恆さん(昭和十)は仙台二高の卒業生。近くは、昨春の選抜高校野球の開会式で、小和田恆さんの母校、仙台二高の選抜入りを祝う。

祖父、小和田恆さんの母校、仙台二高の選抜入りを祝う。

山場、北朝鮮の拉致被害者、横田めぐみさんの母校、雅子さんの母校、仙台二高。

最中に倒れた。そのあとは、柏崎中を訪れ、講演ぶりに。

悲しみに暮れた。その後には、柏崎中。

初

■きょうの物語

「蔵王遭難」は、数奇な運命を辿った仙台二中・二高・新潟高・柏崎高の悲劇。仙台二高と新潟高は、ともに旧制柏崎中（現柏崎高）を母校とする。二高は、柏崎中の校長を歴任した渡辺宏校長が、数職を務めて九年ぶりに柏崎中を訪れ、講演した。その縁で、二高の生徒らが、柏崎中の生徒らと交流を始めた。以前、仙台二中に勤務する以前、旧制柏崎中（現柏崎高）の教諭を務めていた。

遭難事故で引責辞任し、ようやく立ち直りかけていた。

柏崎高は、新潟県内屈指の進学校。十四代目校長の斎藤一郎さんは、「実を結ぶのは、渡辺校長の思いを継ぐ時を待ち望んでいる。」と、部の練習試合も計画されている。

仙台二高と新潟高・柏崎高とは、来年三月の交流を目指し、校長同士の対面を計画している。

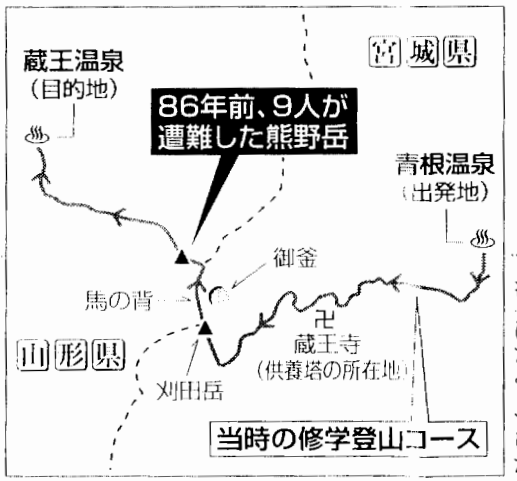
Bと鎮魂の登山

86年ぶり「和解」の旅、慰霊碑に校歌

大風雪の蔵王山の濃霧に生徒九名行方不明

惨死者の家庭

熊野岳に登頂、慰霊碑に触り、犠牲者の冥福を祈る渡辺さん㊤と旧制仙台二中の生徒ら9人が遭難死した事故を報じた、当時の「河北新報」の紙面㊦



蔵王遭難　大正7（1918）年10月23日、旧制仙台二中の4、5年生151人と引率教諭ら4人が修学登山をしたときの出来事。当時、同中学の修学旅行の行き先は日光と東京だったが、この年は軍の関東大演習があり汽車の団体乗車が制限されたため、計画は変更。宮城県川崎町の青根温泉から刈田、熊野岳（1840㍍）を経て山形・蔵王温泉に至る登山行程となったが、「悲劇」は馬の背付近で起きた。

午前6時の出発時は晴れていたものの、一行は進むうちに濃霧と雨に行く手を阻まれ、昼ごろ、馬の背付近で突然の猛吹雪に襲われた。144人は疲労しながらも辛うじて蔵王温泉にたどりついたが、最後尾を歩いていた生徒7人と教諭2人は力尽きて死亡。彼らの遺体は、3日後に熊野岳の行室の中で抱き合って死亡しているのが発見された。

「仙台二中・二高百年史」で「本校史上最大の悲劇」と記された遭難事故。当時大きな社会的反響を呼んだ。仙台市出身の詩人、土井晚翠（1871―1952）も、「山頂の悲劇」という弔魂詩をささげている。

渡辺宏校長

校長の三男、渡辺宏さん（八七）は、昭和六十年八月十六日に五十八歳で亡くなるまで、鎮魂と慰霊の日々だった。

■時代を超えて

だが、鎮魂の思いは、校長の死で消え去りはしなかった。それは息子に引き継がれた。

神奈川県厚木市に住む校長の三男、渡辺宏さんが、年に五十八歳で亡くなるまで、鎮魂と慰霊の日々だった。

だが、鎮魂の思いは、校長の死で消え去りはしなかった。それは息子に引き継がれた。

神奈川県厚木市に住む校長の三男、渡辺宏さんが、年に五十八歳で亡くなるまで、鎮魂と慰霊の日々だった。

だが、鎮魂の思いは、校長の死で消え去りはしなかった。それは息子に引き継がれた。

神奈川県厚木市に住む校長の三男、渡辺宏さん

年十月十六日に五十八歳で亡くなるまで、鎮魂と慰霊の日々だった。

■時代を超えて

だが、鎮魂の思いは、校長の死で消え去りはしなかった。それは息子に引き継がれた。

神奈川県厚木市に住む校長の三男、渡辺宏さん（八七）は、昭和六十年八月から静かに熊野岳への慰霊登山を四回も続けていた。四回目の平成二年八月には「父から受け継いだ遺志は子供にも引き継がなければ」と、長男も連れて登頂した。

これを知った仙台二高OBの千葉英之さん（七一）たちが「この思いに応えよう」と、同高山岳部OBらに持ちかけ、新しい交流が始まった。今春、宏さんの五回目の慰霊登山を仙台二高OBの手助けで実現しようと仲間を集めたのだ。

その宏さんが脳梗塞で倒れたのは今年三月。それでも「もう一度蔵王に登りたい」とリハビリを続けて回復。十月十五日には、宏さんは妻とともに仙台二高の校長室にあいさつに出向いた。

慰霊登山はしていたが学校訪問も、そして遭難事故の遺族と向き合うのも初めてだった。

目の前には犠牲者だった生徒、安積虎雄さんのおい、安積壮吉さん（六九）がいた。宏さんは涙を流しながら「登山の最終決定を下した父の責任は免れません」と父親に代わって謝罪。安積さんは「六年前の慰霊祭でもう区切りはついています。もう十分ですよ」と静かに語った。

■そして山頂へ

十月十六日。

早朝から宏さんは仙台二高山岳部OBら九人の杖を借りながら、熊野岳を目指した。

「ムリをしないほうが…」。退院から間もないこともあり、周囲は心配したが、それは杞憂だった。宏さんの足の速さにみな目を丸くして、OBの一人、大友一郎さん（六九）は「気力、体力には感動しました。うれしいハプニングです」。

一時間ほどで熊野岳の慰霊碑に到着。父の命日に十四年ぶりに慰霊登山が実現した。

「これでおやじも喜んでいると思う」。線香をささげる宏さんの後ろで、仙台二高OBらが歌う「校歌」が尾根に響く。

「おわびに来たのに、丁寧にご助力いただいて、仙台の方々の温かい気持ちには、お礼の言葉もありません。体調が許せば、来年もまたここに立ちたいです」。慰霊登山を終えて宏さんがそう話すと、かたわらの妻の俊子さん（七五）は「私がついて、ゆっくりゆっくり登りますから」と笑顔をみせていた。

遭難事故は、八十六年という時を超えて、人々に新しい結び付きを生み出しているようだ。